おつね。　でも、泣いてござるやうな。

お玉。　はて、そのやうなことは云はぬもの。おとなしくこゝへ來やと云ふに……。（疊かたゝく。）

二人。　あい、あい。

（與之助とおつねは母のそばへ戻る。お霜はお千代を伴ひて奥に入る。）

昌齋。　して、このお二人は……。

お玉。　ふたりの子供はわたしと共に……。

昌齋。　おいたはしけれど、これも是非ない儀、御心中お察し申上げまする。

お玉。　これ、與之助、おつね。をさない耳にも最前からの話のあらましを聞いたであらう。けふの夕むつの鐘を合圖に、母は自害して死にまするぞ。そなた達ふたりは幼い身の上、落してやりたいは山々ぢやが、兄の與一郎は父上の御供して會津のいくさに出てゐるからは、あとに殘つた弟と妹、どうでも人質に取られねばならぬ。たとひ屋敷をぬけて出ても、お千代どのとは譯が違うて、敵が見逃す筈がない。なまじひ捕はれの恥をみるよりも、こゝで母と一緒に死にや。よいか。ふたりともに最期を清うして、さすがは細川忠興の子供よと、敵にも味方にも褒められてたもれ。母も褒めて遣りまするぞ。

與之助。　よう合點がまゐりました。

おつね。　おとなしうこゝで死にまするほどに……。

與之助。　母上、お褒めくださりませ。

お玉。　母ばかりでない。父上も兄樣もみんな褒めませうぞ。

昌齋。　この昌齋も共々にお褒め申さにやなりませぬ。とは云ふものゝいたいけな、若さま姫樣お二方を、むざ〳〵最期のおん供とは……。

お玉。　わが子を褒むるも時による。弓馬槍劍讀み書きが立派に出來たと褒めるなら、親の嬉しさはどうあらう。母が冥土の供をさせ、立派なものぢやと褒めてやる。親も哀れ、子もあはれ。昌齋、未練者ぢやと笑うてたもるな。（泣く。）

與之助。　母上。褒めてやると仰せながら、なぜそのやうにお泣きなされまする。

おつね。　母上と一緒に死ぬるなら、些とも悲しいとは思ひませぬ。

お玉。　ほんにさうぢや。些とも悲しいことはない。泣いたは母の不覺であつた。これ、昌齋。みんな笑うて死にませうぞ。

昌齋。　由ないことを申上げて、なみだをお誘ひ申したは昌齋のあやまり、まつぴら御免くださり

ませ。おゝ、やがてもう日もくれまする。諸侍にも思召のほどを申聞かせて、萬事の用意を仕るでござりませう。

お玉。　侍分のものは格別、中間小者には暇をつかはせ。侍女共もお霜だけをあとに殘して、ほかの者はみな思ひ〳〵に落ちよと申せ。

昌齋。　心得てござりまする。（起ちかゝる。）

お玉。　あゝ、これ、待ちや。わが身の上に取りまぎれて、人の身のうへを忘れてゐました。南蠻寺の門前より連れてまゐりし巡禮二人を、すぐにこれへ呼んでたもれ。

昌齋。　はあ。（下のかたに去る。）

與之助。　母上、侍が死ぬときには衣服をあらためるとか聞きました。

おつね。　わたくしにも白い小袖をお着せなされてくださりませ。

お玉。　おゝ、よう氣がつきました。さあ、奥へ行つて二人ともに、死出の晴着を着せかへて遣りませう。さあ、來やれ。

（お玉はふたりの手をひきて奥に入る。下手の緣づたひに、與次兵衛とお松はおづ〳〵出づ。）

與次兵衛。　これ、お松よ。こゝは立派なお座敷のやうぢやが、こんな處へうか〳〵と踏み込んで、また叱られはせまいかな。

お松。　でも、あの坊主頭のお侍がこれへ通れとおつしやりました。

與次兵衛。　では、こゝに控へてゐようか。（坐る。）

お松。　もし、ぢい樣。もう御禱りの時刻ではござりませぬか。

與次兵衛。　やがて夕の御禱りの時刻であらう。どこにゐても御禱りを忘れてはならぬぞよ、

お松。　あい、あい。（棚に眼をつける。）おゝ、あすこにマリヤ樣の御像が祀つてあります。

與次兵衛。　どれ、どれ、どこにぢや。

（お松は與次兵衛の手をひいて棚の前にゆく。）

與次兵衛。　おゝ、ほんにこれはマリヤ樣ぢや。サンタ、マリヤ……。

（二人はマリヤの像を拜す。奥よりお玉の方出づ。）

お玉。　二人はそこにゐましたか。

與次兵衛。　はい、はい。（下のかたに來る。）

お玉。　氣分はどうぢや。すこしは胸が開きましたか。

與次兵衛。　結構なお藥を頂戴いたしまして、胸もずつと開きました。ありがたうございます。

お　玉。　早速ながら云うて聞かせにやならぬことがある。折角かうして連れて來たれど、思ひもよらぬ大事出來して、わたしは自害せねばならぬ。

二　人。　え。

お　玉。　屋敷へも火をかけねばならぬ。

二　人。　え。

お　玉。　かういふところへ來合せたがそち達の不祥ぢや。こゝにいつまでもうか〳〵して、傍杖の怪我をしてはならぬ。氣分の好うなつたのを幸ひに、些とも早う立退いたがよからうぞ。

與次兵衛。　どんな大事か知りませぬが、自害などとは以ての外。そればかりはお止まり下さりませ。

お　松。　わたくしも共々おねがひ申します。

お　玉。　自害を思ひとまれと云ひますか。

與次兵衛。　南蠻寺御參詣といひ、こゝにマリヤ樣の御像が祀つてあるのを見ますれば、云はでも知れたお前さまは切支丹宗門の御信者。今更申すまでもございませぬが、われ〳〵の宗門では自害をかたく禁じてございますぞ。

お　玉。　むゝ。

與次兵衛。　わたくしなども此のやうな、生き甲斐もない業病の身の上となつて、かうしておめ〳〵と生きてゐるのは宗門の教を守るが爲。お前樣もおなじ御宗旨でありながら、自分で自分の身を殺さうとは、天の教にそむきませう。たとひどのやうな難儀に逢つても、生きらるゝだけは生きるのが、われ〳〵信者の掟でございます。

お　玉。　それは先刻も小西殿からそれとなく意見を聞いた。わたしもそれを知らぬではなけれど……。今となつては何うならう。

（お玉はぢつと思案してゐる。南蠻寺の鐘の聲きこゆ。お松は起つて縁に出る。）

與次兵衛。　いまが夕のお禱の時刻ぢや。

（ふたりは形をあらためて祈る。お玉も思はず縁に出る。鐘の聲つゞけてきこゆ。お玉も思はずひざまづきて禱る。）

與次兵衛。　もし、奥樣。あの鐘の音がおまへ樣のお耳へは響きませぬか。

お　松。　どうぞ死なずに下さりませ。

お　玉。　なるほど一圖に死なうと思ひつめたは、女のあさい心であつたかも知れぬ。自分の命でも自分の自由にはならぬ。生くるも死ぬも神の御指圖にしたがはねばなるまいか。……。い

や、いや、今こゝを落ちのびたら卑怯者と笑はれるであらう。世の物笑ひとなつては我身ばかりか、夫の恥……。細川忠興の妻のお玉は、今こゝで死なねばならぬ。羅馬法王の臣下たるガラシヤは、今こゝで死んではならぬ。神の教にしたがふが大事か、武士の妻たる道を守るが大事か。

（錦の聲つゞけてきこゆ。お玉は思案に惱んでゐる。）

お玉。　こりや思案に餘つたなう。

（お玉は緣に坐りて空を見つめてゐる。上のかたの庭口よりお千代の方は忍びすがたにて、侍女お福をつれて出づ。）

お千代。　くどいやうではござりまするが、母上にはもう一度御思案なされて、一緒にお立退き下さりませぬか。

お福。　わたくしがお供申しまする。

お玉。　いや、先刻も申した通りで、わたしには妾のこゝろがある。兎にも角にもそなたは早う。

お千代。　はい。

（お千代はまだ起ち兼れてゐる。下のかたの庭口よりお霜走り出づ。）

お霜。　若侍の注進によれば、いよ〳〵夕六つの時刻が迫つて、お城からは迎ひの人數が繰出したと申しまする。追付けこれへまゐりませう。さあ、お千代様。おなごり惜いは御道理なれど、もう些とでも御猶豫はなりませぬ。御門前を取りまかれぬうちに、さあ、早うお立退きなされませ。

お玉。　迎へへの人數が寄するとあれば、もう泣いてゐるところでない。さあ、お千代どの。えゝ、まだ行きませぬか。

お千代。　（思ひ切つて。）では、御免くださりませ。

お福。　さあ、おいでなされませ。

（お千代はお福に伴はれて見かへりながら落ちてゆく。）

お玉。　これで一先づ安堵。生きらるゝものは生きて逃れた。

（夕六つの鐘きこゆ。）

お霜。　おゝ、ありや夕六つ。

お玉。　いよ〳〵討手の寄せてくるか。

（お玉は思はず起ちあがる。お松はその袂にとりつく。）

お松。　お前様も死んでくださりますな。

お玉。　先刻聞いたは祈禱の鐘、今きこゆるは夕むつの鐘……。あれは人に死ぬなと敎へ、これは冥土の迎ひをいそぐ。ふたつの鐘に一つの命……。この身はなんとなることぞ。

與次兵衛。　そこを死なぬが神の敎でございます。

お玉。　死ぬは日本武士の敎ぢや。

（向うにて人馬の物音きこゆ。）

お松。　（起ちあがる。）あの物音は……

お霜。　討手が御門前へ押寄せしか。

（小笠原昌齋は薙刀を持ち、若侍ふたりを連れて走り出づ。）

昌齋。　もはや片時も御猶豫はなりませぬ。むかへの人數はお屋敷の四方を取りまき、すはと云はば攻め入らんと、弓鐵砲をそろへて居りまする。それがしは御門をふせぐ間、奥方には御用意あれ。

お玉。　われ〳〵は上様に弓ひく者にあらねば、寄手にむかつて矢一筋なりとも射出すこと無用。たゞ愼んで控へてをれ。

昌齋。　はあ。（引返して去る。）

お霜。　いよ〳〵時は迫りました。早う御覺悟なされませ。

お松。　いえ、いえ、死んでくださりますな。

（お松は再びお玉の袂にとりつく。お玉は思案にくれてゐる。）

お霜。　（緣へ駈けあがりてお松をつき退ける。）えゝ、そち達の知らぬことぢや。邪魔せずと退いてゐや。もし、奥様。この期におよんで御猶豫は、日ごろの御氣性にも似合ひませぬ。おそれながら御卑怯でございませうぞ。（つめ寄る。）

お玉。　武家氣質一徹のそち達の目から見たら、わたしは卑怯とも未練とも見ゆるであらうなう。

お霜。　では、おめ〳〵と迎へをうけて、人質になる御所存か。

（お玉の方は答へず、やはり思案に暮れてゐる。人馬の音近くきこゆ。）

お霜。　あれ、あれ、返事のおそいを待ちかねて、いよ〳〵御門を打破るとみえまする。もし、奥様。今が生死の大事の鍔際、しかと御分別なされませ。

（川北石見、旅姿、小袖の下に籠手をつけ、袴をくゝりて脛當をはき、笠を持ちて走り出づ。）

お霜。　おゝ、石見様か。

細川忠興の妻

石見。殿のお使をうけたまはり、陣中より取つて返してござる。奥方はいづれに……。（心のせく體にて見る。）

お玉。（顔をあげる。）おゝ、石見。戻つたか。して、殿にも子供にも變りはないか。

石見。殿にも若殿にもお變りなく、今ごろは小山か宇都宮あたりまで御進發の事と存じまする。

お玉。おゝ、殿も御無事、與一郎も堅固、それで先づおちつきました。

石見。が、おちつかれぬは御門前の騒動。實はこれへまゐる途中、お千代樣とお福どのに行き逢うて、委細逐一うけたまはり、心もそゞろに駈付けますれば、表御門は塞がれて寄り附かれず、裏御門の塀を乘り越えてやうやくこれまで忍び入りました。なには兎もあれ、殿のお使、これ御覽くだされませ。

（石見は頸にかけたる包みより紙につゝみたる短尺をとり出す。）

お玉。して、ほかに御口上はござりませぬか。

石見。別に何事も仰せられませぬ。たゞ其方いそいで大坂へ立ち越え、これを奥に手渡しいたせとのことにござりました。

お玉。（短尺を取りてよむ。）なびくなよ我がませ垣の女郎花、男山より風はふくとも……。さては夫忠興殿には、かゝる事もやあらんかと、未然に察して陣中よりわざ〳〵使者をつかはされ、敵になびくなと敎へられしこの歌。たとひ女郎花のかよわくとも、かゝる時には嵐になびかず、いさぎよく散るが女の魂……おゝ、わたしも今は覺悟をきめた。

お霜。して。その御覺悟は……。

お玉。兎もかくも奥へ來やれ。石見も庭傳ひに……。

二人。はあ。

（お玉たち上る。與次兵衞とお松は左右より又とりつく。）

お松。もし、奥樣……。

與次兵衞。その御覺悟が氣がかりでござりす。

（お玉はふたりを見てぢつとなる。人馬の音また聞ゆ。）

お玉。あとのことには構はずと、ちつとも早う立退きませうぞ。

（お玉は袂をふり切つて奥に入る。お霜もつゞいて入る。石見は上のかたに入る。お松はそつと起つて襖をのぞく。）

お松。もし、ぢい樣。

細川忠興の妻

與次兵衛。奥様はどうなされた。

お　松。あれ、腰元衆が奥の襖や障子をみんな取拂うて……。

與次兵衛。おゝ。

お　松。奥様はふたりの子供衆をあつめて、なにか云ひ聞かしてござるやうな。

與次兵衛。おゝ、して、して、どうなされた。

お　松。そばには今のお侍とお女中が兩手をついて泣いてござる。

與次兵衛。では、どうでも自害の御覺悟か。

お　松。悲しいことになりました。

與次兵衛。叶はぬまでももう一度、御意見申さにやなるまいぞ。お松、來やれ。

お　松。でも、あすこへ行つたら叱られませう。

與次兵衛。叱られても大事ない。さあ、さあ、早う來やれ。

（ふたりは奥へ行かうとする時、出合ひがしらにお霜出づ。）

お　霜。これ、どこへ行きやる。奥方の思召にてこの金子を下さるほどに、ありがたく頂戴して早う行きや。（金づつみを出す。）

與次兵衛。（押退ける。）いえ、いえ、お金などは入りませぬ。それよりも何うぞ奥様のおん身に恙なきやうに、お諫め申してくださりませ。

お　霜。それは再應御思案の上のこと。今更なんと申したとて思ひ返されう筈がない。無駄な御意見申さずと、早うこゝを立ちやといふに……。えゝ、まだ判らぬかいなう。

（お霜は與次兵衛を押退ける。與次兵衛よろ〳〵と倒れるを、お松は介抱する。小西攝津守行長、鉢巻、鎧、陣羽織にて出づ。）

行　長。奥方はいづれにござる。小西行長、御意得申したい。

（奥より川北石見出づ。）

石　見。むかしは兎もあれ、今は敵方の小西殿。ことに殿がお留守の折柄、奥方に直々の對面は相成り申さぬ。たつて通らば川北石見が、お相手になりませうぞ。

行　長。（あざ笑ふ。）はて、お身達の知らぬこと。おなじ宗門の好しみを以て、奥方を救ひにまゐりし行長。邪魔せずと通されい。

石　見。口賢く申されても、今となつては一寸も奥へ踏み込むことは相成り申さぬ。

行　長。えゝ、面倒な。

（行長は縁に上らうとするを、石見は押戻して庭にとび降りる。行長は石見を突き退けて行かうとするを、石見は遣らじと爭ふ。このうちに小笠原昌齋は薙刀を持ちて、敵の軍兵ひとりと闘ひながら出で、軍兵は逃げて入る。）

昌齋。　さては小西か……。

（これも薙刀を把り直して打つてかゝる。奥よりお玉の方は白き衣裳に着かへて、懐劍を持ちて出づ。）

お玉。　あゝ、これ、兩人。はやまるまい。小西殿にもお鎭まりくだされ。

（これにて三人鎭まる。）

お玉。　小西殿がわざ〳〵參られしは、うけたまはるまでもなく入城のお勸めかと存じまするが、わたくしは最早覺悟を決めました。ふたりの子供を刺殺して、おなじ枕に相果てまする。

行長。　かくもあらんと存じたれば、先刻もそれとなく御意見申し、今もかさねておすゝめに參りしが、どうでも入城は御不承知か。

お玉。　信仰あさき者とお笑ひくださるな。たとひ神の敎に背きましても、わたくしは矢はり日本の女、武士の妻として死にまする。介錯の役は川北石見。

石見。　はあ。

お玉。　あとの始末は昌齋にたのみましたぞ。

昌齋。　はあ。

與次兵衛。　では、どうでも……。お情なことでございます。

（與次兵衛は這ひ寄らうとするを、お霜は隔てる。人馬の音、鬨の聲きこゆ。昌齋は表へむかつて大音によぶ。）

昌齋。　御門前のかた〴〵に申上ぐる。當屋敷のもの決して御手向ひはつかまつらぬ。女中方の用意ひま取る間、今しばらくお待ちくだされ。

（表は鎭まる。）

お玉。　この間に最期の用意を早う。小西殿、身勝手ながら未來の救ひをお禱りくだされ。

行長。　是非におよばぬ。心得申した。

（行長は頸にかけたる十字架をいたゞきて額にあてる。奥より與之助とおつれも白裝束にて走り出づ。）

與之助。　はゝ上。先刻からおとなしう待つてゐまする。

おつね。　早う殺して下さりませ。

お玉。　おゝ。

（お玉の方は二人をいだき寄すれば、お霜とお松は泣きふす。昌齋はおもはず薙刀をすてゝ土に坐す。石見は介錯のこゝろにて片肌をぬぐ。行長と與次兵衛は無言にて禱る。月の影、蟲の聲。）

――幕――

べらぼうの始（喜劇）

明治四十五年（大正元年）三月作。
大正十年三月。有樂座初演。

初演當時の主なる役割――べらぼうと呼ばれた人（市川介十郎）大坂の商人（松本幸四郎）江戸の商人（澤村宗之助）名主の娘（村田美繭子）長崎の商人の兄（松本錦吾）など。

登場人物――べらぼうと呼ばれし人。濱の代官。名主。名主の娘。濱の男三人。長崎の商人の兄。その弟。大坂の商人。江戸の商人。ほかに代官の家來。茶店の娘。見物の男女など。

馬鹿を罵つてべらぼうと云ふのは、いつの代から始まつたのかと詮議すると、近代世事談に、寛文十二年（今より二百四十餘年前）の春、大坂道頓堀で異形の人を見世物にした。その人間はあたま尖り、おとがひは猿のごとく、名をべらぼうと云ふ。それが評判になつて、『京師東武に及び、芝居をたてゝ諸人に見せける。これより賢からぬものを罵り辱むるの詞となれり』云々とある。この喜劇はそれから思ひ付いたもので、事實より少しく年代を繰上げて、慶長末年の事とした。

春の晴れたる日。播州邊の濱街道、砂地に青き松つらなりて、碧海には淡路島遠くみゆ。上のかた

べらぼうの始

に茶店ありて、床几をならべたり。

（濱の代官、家來數人を率ゐて立つ。濱の男三人ひざまづく。）

代官。今朝この濱邊に、不思議の者が流れついたと申すが、それはいづこに捕へてあるな。

男甲。今朝ほどわたくし共三人がこの濱邊へ出まするとと、人間だか鬼だか得體のわからぬ者が、あのやうな小舟に乘つて流れ着いたのでございます。

代官。なにさまあれは見馴れぬ舟ぢや。兎も角もこれへ曳き出せ。拙者が檢分するであらう。

男三人。かしこまりました。

（男三人は濱邊の砂地にあげたる西洋型の短艇をひき出す。代官は仔細らしく頭をかたむけて見る）

代官。むゝ。これはおそらく異國の舟であらうな。

男乙。仰せの通り、日本の舟ではございますまい。

代官。して、これに乘つてゐたのは唯ひとりか。

男丙。左樣でございます。

代官。むゝ。

（代官は思案するところへ、濱の名主が先に立ち、濱の男大勢が異人の前後をかこみて出づ。異人は國籍不明、髪長くのびて、顏色おとろへ、衣服も潮に洗はれて破れ朽ちたり。濱の女房、娘、小兒などもそのあとより附き來りて、めづらしげに見物す。茶店の娘も出でて見る。名主は代官の前にうや〳〵しく一禮す。）

名主。申上げます。これが今朝召捕りましたる不思議の者でございます。

（男どもは彼の異人を前にひき出す。異人は眼をひからせて代官を視る。代官も家來も悸然とする。）

代官。これ、名主……。な、なぜ、かやうな異體の者を、放し飼にいたして置くのぢや。早く繩をかけぬか。

家來一。まことに鬼とも人とも判らぬ曲者。

家來二。これは一體何者でござらうな。

代官。なには兎もあれ、油斷のならぬ奴……。いづれも嚴重に警固いたせ。

家來。心得ました。

（いづれも刀の柄に手をかけて身構ふるを、名主は制す。）

名主。はて、御心配なされまするな。形こそかやうに變つて居りますが、先刻から試して見まするところ、別にわれ〳〵人間に對しまして、禍をなすやうでもござりませぬ。わたくしのぺらぼうの始

代官。　愚案では、もしや異國の人間ではあるまいかと存じますが……。

名主。　異國と申せば、唐、朝鮮、天竺、琉球……。それは我々もかねて存じて居るが、彼等とはまつたく風俗が違ふぞ。もしや南蠻人かとも思ふが、果してどうであらうか。（かんがへて。）

代官。　はい。ときゞに鳥の鳴くやうな聲をして、べらぼう、べらぼうと申しますが、なんのことか一向に判りませぬ。

名主。　べらぼう……べらぼう……。これは拙者にもわからぬ、困つたものぢや。兎にかく彼が南蠻人であるかないか。拙者が試してくれる。待て、待て。

代官。　（代官は懐中より葡萄牙人の肖像をかきたる古き油繪をとり出し、異人に示す。）

代官。　どうぢや。其方はこれか。

（異人には詞が通ぜず、唯うつかりとその繪をながめてゐる。）

代官。　これかと申すに……。返事をいたさぬか。いや、これは拙者が悪かつた。かれに日本の詞が判らう筈はない。困つたなう。なんとか判らせる工夫はあるまいか。

名主。　先づお待ちなされませ。

（名主は彼の繪姿を持ちて、異人のそばへ進み寄り、先づその繪姿を指し、次に異人を指さし、おまへはこれと同じ人間かと手眞似にて問ふ。異人はその意を解せず、たゞ不思議さうに名主の顏をみる。名主も困りて、色々の手眞似をするうちに、異人もやうやく解したりと見えて、頭をふる。）

名主。　南蠻人でもないと見えます。

代官。　むゝ。では、べらぼうといふ國の人間かな。

家來一。　併しべらぼうと云ふ國は、つひぞ聞いたことがござりませぬ。

家來二。　眼の鋭い、鼻の隆いところを見ますると、矢はり天狗のやうなものではござりますまいか。

男甲。　でも、天狗は海には棲みますまい。

男乙。　もしや鬼ケ島からでも吹流されて來たのではござりますまいか。

男丙。　なにしろ、たゞの人間とは見えませぬ。

（評議まち〳〵なる中に、異人はありあふ小石を拾ひて、土に地圖を描き、これが我國なりと指し示せど、人々には判らず、たがひに顏をみあはせる。）

代官。　やはり判らぬなう。（地圖を差覗きて。）これは一體、繪であらうか、字であらうか。

名主。　さあ、なんでござりませうか。

（異人は更に海を指さし、自分は風雨のため難船して、こゝへ漂着せりと手眞似にて語る。この、ちに見物人おひ〳〵に加はり、江戸の商人、大坂の商人も旅姿にて、その間にまじりて立つ。）

代官。なにが何やら些ともわからぬが、遠い海から流れて來たには相違あるまい。兎にかくかやうな怪しいものを、この地に留め置くこと相成らぬ。再びこの小舟に乘せて、もと來し海へ流してやれ。それが一番無事であらう。

男甲。就きましてはお願ひがございますが、これを海へ流すのは止めにして、わたくし共へお引渡しくださるわけには參りますまいか。

代官。これを引取つてなんといたす。

男乙。へい。些と錢儲けが致したうございます。

代官。なに、錢儲けがしたいと……。

男丙。大坂の道頓堀か、京の四條河原へ持ち出しますれば、わたくし共も旨い酒が飲めるのでございます。

代官。はゝあ、判つた。いや、其方共もぬけ目がないわえ。いづこの國の者か得體のわからぬ其奴、觀世物に晒しても苦しうあるまい。しからば其方どもの願ひにまかせ、かれを引渡して遣はすから、よいやうに致せ。

男三人。ありがたうございます。

代官。檢分相濟む上からは、拙者はもはや立歸るぞ。

名主。お役目御苦勞に存じます。

代官。さて〳〵世には不思議な者があるものぢやなう。家來まゐれ。

家來。はあ。

（代官は家來を率ゐて去る。これと引き違へに長崎の商人、兄と弟とふたり連れにて出で來り、茶店の床几に腰をかける。）

茶店の女。入らつしやいまし。

長崎の兄。よい天氣で結構でござるな。

茶店の女。左樣でございます。

（女は茶を汲んで出づ。兄弟は茶を飲みながらあたりの景色など眺めてゐる。そのあひだに男どもは彼の短艇を濱邊へ運び去りて、再びもとの所にあつまる。）

名主。今お代官樣も云はれた通り、貴樣達はなか〳〵拔目のない男ぢや。得體のわからぬこの人べらぼうの始

間を、見世物に賣つて大金儲けをする目論見ぢやな。

男甲。さうぢや、さうぢや。去年の正覺坊や、一昨年の人魚に味を占めて、今年はこれで錢儲けをする積りぢや。

名主。なるほど、正覺坊や人魚とは違うて、これは屹と大當りであらうよ。貴樣たちは運の好い男ぢやなう。これ、なんと物は相談ぢやが、わしも一口乘せては呉れまいかな。

男乙。どうして、どうして、飛んだことを……。いくら名主樣の御威光でも、こればかりはなう。

男丙。わし等がこれを見つけたと云ふのは、約りこの三人に天から福を授かつたのぢや。

男甲。その福をむやみに人に分けては、却つて天樣道の御罰を受けようも知れませぬ。

男乙。幸が變じて禍となつては大變ぢや。

男丙。まあ、こればかりは堪忍してくだされ。

名主。なんの彼のと巧く理窟をつけるな。だが、まあ仕方がない。貴樣達が達て不承知とあれば、殘念ながら指を銜へて引込まうか。そのかはりに、見世物でしつかり儲けたら、わしにも一杯買へよ。よいか。

男三人。へえ、ようございます。

名主。よいか。その時になつて知らぬ顔をするなよ。

男三人。大丈夫でございます。

（見物人をかき分けて、大坂の商人進み出づ。）

大坂。もし、もし、お話の中途ぢやが、お前方に些と折入つて相談がありまする。

男甲。なに、相談があると……。おゝ、こなたはどうやら見たやうな人ぢやが……。

大坂。はて、忘れさつしやつたか。わしは去年この濱で、正覺坊を買うて往んだ男ぢやが……。

男乙。なるほど、正覺坊を五兩で買つて行つた、大坂の人であつたか。

大坂。さうぢや、さうぢや。あの正覺坊では、いやもう苛い目に逢ひましたぞ。

男丙。それは又どうしたことぢや。

大坂。まあ、聞かつしやれ。わしもあの正覺坊では大儲けをしようと思うて、金五兩で買うて往んだわ。さてそれから道頓堀に小屋をかけて、これは須磨の浦で生捕りましたる稀代の正覺坊、甲羅のさしわたしは三間半、目方は八百貫匁、啼く聲は鼠のやうぢやと、口から出放題に聲をからして呼び立てると、見物人が來るわ、來るわ、初日は大入り木戸止めであつた。

べらぼうの始

男三人。　えらい景氣ぢやな。

大　坂。　ところが、いよ〳〵木戸へ這入つてみると、話半分ほどにもない代物ぢやに因つて、今度は見物人が吃くわ。ほやくわ。えゝ、あはうらしい。高い錢出してこないなものを誰が見ようぞと、そのあくる日からは一人も來やせぬ。

男三人。　はゝゝゝ。

大　坂。　いや、笑ひごとぢやないぞ。おまけにその正覺坊めが、すきな酒を飲むわ、飲むわ。こつちも大事の太夫ぢやと思うて、飲みたいだけ飲ましておけば、一日に五斗も六斗もぐい飲みぢや。その酒代だけでも容易なことぢやない。そのほかに小屋掛けやら、繪看板やら、なにや彼やの入目を算用したら、えらい損耗ぢや。さすがの私も聲をあげて泣いたわい。

男　甲。　さう聞けば氣の毒のやうでもあるなう。

大　坂。　ぢやに依つて、こゝが相談。その損耗の埋めあはせに、今度こそは一番大あたりを取りたいと思ふのぢやが……。

男　甲。　わかつた、わかつた。では、これを買つて行きたいと云はしやるのか。

大　坂。　おゝ。なんと廉う手放してはくださるまいか。

（男どもは額をみあはせる。）

男　乙。　どうで見世物にしようと思つてゐたところぢや。いつそこゝで賣つてしまへば世話無しぢやが……。

男　丙。　それも約りは値段次第……。一體いくらで買はしやるな。

大　坂。　さあ、今もいふ通り、わしも先度の損があるに依つて、お前がたの方でも些とは勘辨して貰はにやならぬぞ。よいかな。

男　甲。　して、その相場は……。

大　坂。　その相場は今立てる。

男　乙。　どうぢやな。

男　丙。　どうぢやな。

大　坂。　はて、せはしない。わしの方にも色々算當の都合がある。（かんがへて。）どうぢやな、これでは……。（指三本をみせる。）

男　甲。　え、三十兩か。

（大坂の商人は頭をふる。）

べらぼうの始

男乙。では、三百兩か。

（商人はおなじく頭を掉る。）

男丙。もしや三兩ではあるまいか。

（商人はうなづく。）

男甲。えゝ、途方もない。これが唯の三兩で賣られるものか。むかしから日本に例のない見世物ぢや。人魚や正覺坊とは代物が違ふぞ。

大坂。相談はでけんかな。

男乙。出來るも出來ぬも、まるでお話にならぬわ。

（江戸の商人つか〳〵と進み出づ。）

江戸。三兩で不承知ならおれが買はう。廿兩……。

（男どもは顏を見合せる。）

大坂。（むつとして。）これ、お前はどこのお人か知らぬが、人の商賣の横合から口を出して……。まあ、すつ込んでゐさつしやれ。

（江戸の商人は耳にもかけず。）

江戸。廿兩では不承知なら、一足飛びに三十兩……。

男三人。やあ。

（男どもは再び顏をみあはせる。大坂の商人は躍起となつて、叫ぶ。）

大坂。えゝ、お前は無法な人ぢや。この相談はわしの方が先口ぢやによつて、先づわしの方の片附くまで、控へさつしやれと云ふに……。

江戸。そつちの片附くのを待つてゐたら、日が暮れる。江戸の男は氣がみじかい。（男どもに向ひ。）どうだ、三十兩では手は打てないか。まだ不足なら……。

（大坂の商人はたまらず、江戸の商人をかき退ける。）

大坂。えゝ、好加減にさつしやれ。お前はなんの恨みがあつて、わしが商賣の邪魔をするのぢや。

（男どもにむかひ。）なう、皆の衆。すべて物事には順序がある。先口のわしを差措いて、餘の者と相談もなるまいが……。

男甲。いや、いや、先口でも後口でもかまはぬ。相場の高い方へ賣る分のことぢや。

江戸。それ、みろ。賣主の方でさう云ふからには、だれが買つても可い理窟だ。

大坂。えゝ、お前はうるさい人ぢや。（突き退ける。）

江戸。　えゝ、なにをする。口で云つても濟むことに、うぬは手出しをするな。

大坂。　邪魔になるから退いて居れといふのぢや。

江戸。　さう云ふうぬが邪魔だから退いてゐろ。

大坂。　なんの、なんの、わしや金輪際動くことぢや無いわい。

江戸。　なにを云やあがる。贅六め。

（江戸の商人は腕まくりして立ちかゝれば、大坂の商人も負けてゐず、兩人は一生懸命になつてむしり合ふ。異人は見かねて割つて入れば、江戸の商人は腹立ちまぎれに誰彼の頓着なく、その横面をはり飛ばす。異人おどろき逃げんとして、大坂の商人に突き當れば、大坂の商人も逆上して相手をよくも視ず、これも異人の胸倉をつかみ捻ぢ倒さんとし、兩人折りかさなつて倒れる。江戸の商人はその上に乘りかゝつて無闇に撲つ。大混亂。名主も濱の男共も捨置かれず、走り寄つて三人をひきわける。）

名主。　いや、これは亂騒ぎぢや。まあ、まあ、待たつしやれ。どちらに怪我があつても悪い。まあ、おちついて相談したらどうぢやな。や、この異人は日を眩したやうぢやぞ。

男甲。　なるほど、ぶつ倒れたまゝで起きさうにもせぬわ。今の騒ぎで目をまはしたに相違ない。

大坂。　大事の太夫を殺しては大變ぢや。

江戸。　一體誰が殺したのだ。

大坂。　えゝ、おまへが殺したのぢやないか。

江戸。　なんで俺が知るものか。貴樣の打ちどころが悪かつたのだ。

大坂。　いや、お前ぢや、お前ぢや。

江戸。　えゝ、貴樣だ、貴樣だ。

名主。　そんなことを爭うてゐるよりも、早く活す工夫が肝心ぢや。

男甲。　早く水を持つて來い。

男乙。　さあ、水ぢや、水ぢや。

（男共はうろたへて、茶店より水を持ち來り、倒れたる異人にふくませる。）

男甲。　おうい。

男三人。　おうい。（呼び活ける。）

江戸。　唯おうい〳〵と呼ぶばかりでは通じまい。名はなんと云ふのだね。

名主。　さあ、その名が判らぬので困つたなう。なんでもべらぼうと云ふのが、國の名か人の名ら

しいが……。

江戸。では、兎もかくも呼んでみよう。（異人の耳に口をよせて。）べらぼうやあい。

大坂。べらぼうやあい。

皆々。べらぼうやあい。

（みな口々に呼びかくれば、異人は眼をみひらく。）

男甲。おゝ、好鹽梅に氣が注いたらしいぞ。

男三人。やれ、やれ、安心した。

名主。ところで、わしが思ふには、大坂のお人も、江戸のお人も、つまりがこの異人を種にして、金儲けをしたいと云ふのであらうが……。

大坂。さうぢや、さうぢや。

江戸。それに相違ないのだ。

名主。ぢやに依つて、わしの捌きぢや。兎もかくもこれを二人が引き取つて、先づ大坂では道頓堀、京は四條河原、伊勢は白子の觀世音、鎌倉は雪の下、江戸は淺草の觀世音と、順々に興行してまはつて、その儲けは山分といふことにしたら雙方にいさくさはあるまいが……。

江戸。なるほど、そんなら二人が半分づつ資本を出して、儲けも山分けか。いつまで押合つてもさうしたらどうでござるな。

大坂。かうなつたら仕樣がない。わしもそれで手を打ちましよ。

男甲。果てしがないから、大坂の人に異存がなくば、こつちはそれで我慢しませうよ。

大坂。そこで、いくらに引き取つてくださるのぢや。

江戸。まあ、待つしやれ。今のさわぎでこの通りの大汗ぢや。

（云ひつゝ汗をぬぐへば、江戸の商人も腰の扇をとりて遣ふ。）

茶店の女。なにしろ、喉が渴いてならぬ。おい、姐さん。湯でも茶でも一杯くれないか。

（江戸の商人は一方の床几に腰をかける。大坂の商人も腰をおろす。）

大坂。あい、あい。

江戸。やれ、やれ、えらい目に逢うた。

（茶店の女は茶を汲んで出づ。ふたりは汗をぬぐひながら茶を飲む。長崎の商人兄弟は先刻より默つて見物してゐたりしが、この時、笑をふくみて聲をかける。）

べらぼうの始

長崎の兄。さつきから見物してゐましたが、江戸のお方も大坂のお方も御苦勞でござりましたな。はゝゝゝ。

大　坂。いや、おとなげもない所をお目にかけて、お恥かしうございます。

長崎の弟。お前さん方はその人を見世物にする積りでござりますかえ。

江　戸。さやうさ。（誇るがごとく。）京大坂から關東へ見世物にして打つてまはれば、屹と當ると踏んでゐますのさ。

長崎の兄。さあ、あたるか當らぬか知りませぬが、その人は異國の人間でございませうぞ。

名　主。わしも初めはさう思ふたが、お代官樣のお調べでは、唐で無し、朝鮮でなし、天竺琉球でなし、南蠻人で無し。たゞ異人とはいふものゝ、人か鬼か、山男か海坊主か、判つたものではござらぬぞ。

長崎の兄。はゝゝゝ。失禮ながらお前方は井のなかの蛙仲間ぢや。わしらは長崎の商人で、異國の船や異國の人を、子供のときからたび〳〵見てゐますが、唐朝鮮天竺琉球のほかにも世界の國々は澤山ある。一口に南蠻と云うても、イスパニア、ポルトガル、オランダ、メキシコ、ローマ、まだそのほかにも呂宋と云ひ、瓜哇といひ、かず〳〵の島や國もあれば、人もある。これも大方それ等の異國の人が、遠い海で難船して、自分一人こゝへ流れ着いたのでござりませう。

長崎の弟。お前方がふだん見馴れぬと云うて、一圖に人間でもないやうに決めてしまふのは、あまりに淺薄ではござりませぬか。廣い世界のうちには、われ〳〵とは髪の毛の色も違ひ、顏の色もちがひ、眼の色も違ひ、言語もちがふ人間が澤山住んで居りまするぞ。

（兄弟笑ふ。みな〳〵顏を見あはせる。）

大　坂。さう云うても、こんな不思議な人間は、繪に描いたのも見たことがござらぬなう。

江　戸。おれもつひぞ見たことがない。

名　主。わしも知らぬ。

男三人。わしらも初めてぢや。

江　戸。これだけの人があつまつて、誰も知らぬところを見ると、萬一異國の人間としたところで、どこの馬の骨か判つたものではあるまい。

大　坂。見世物にしようが、どうせうが、誰からも故障はない筈ぢや。

長崎の兄。でも、人間と正覺坊とは違ひませうぞ。

江戸。なんの、こんな奴等は正覺坊と大した變りはあるものか。

（名主の娘出づ。）

娘。父さん。なにやら可怪な人が流れ着いたと聞きましたが、それはどこに居りまする。

名主。それ、そこにゐるのぢや。

（娘は異人をみて、驚異の眼をみはる。異人も娘の美しきにおどろきて、飛び起つ。）

異人。おゝ、べらぼう、べらぼう……。

（手をひろげて抱かんとすれば、娘は膽をつぶして飛び退く。）

江戸。やあ、こいつ色氣のあるところを見ると、猶々のお仲間かも知れないぞ。

名主。これ、娘。嫁入前のものはこんな者の傍へうつかり寄るなよ。

娘。あい、あい。

長崎の兄。（打笑む。）はゝ、怖いことはござらぬ。して、この人には今朝からなにを食はして置きなされた。

男甲。なにを食はしてよいか、あたりが付かぬので、まだ其儘にしてあるが……。

長崎の兄。それは可哀さうな。先づ鳥か魚を食はして遣つたらようござらう。これ、姐さん。酒はありますかね。

茶店の女。はい、はい。すぐにお燗をいたします。

長崎の兄。いや、冷でもよからう。

（茶店の女は徳利とさかづきとを持ち來る。兄は杯に酒をつぎて異人にすゝむれば、異人はすこし躊躇せしが、やがて杯をかたむけて大いによろこぶ。）

異人。おゝ、べらぼう、べらぼう……。

（手眞似にてもう一杯くれといふ。兄は再びついでやれば、異人はこゝろよく飲み干す。みな〳〵不思議さうにみる。）

大坂。やあ、こいつも飲むわ、飲むわ。先度の正覺坊のお仲間ぢやぞ。

長崎の弟。はて、異國の人はみな酒が好きでござりますよ。

（弟は徳利を把りて、まだ飲むかと問へば、異人はうなづく。弟は酒を注がんとすれば、異人は頭をふり、更に娘を指さして。あの女に酌をして貰ひたいといふ。）

江戸。なに、あの娘に酌をして貰ひたいと……。こん畜生、呆れた奴だ。增長して色々のことを云ふぞ。

べらぼうの始

長崎の兄。はて、折角の頼みぢや、きいてお遣りなされませ。さあ、娘御。些とも怖いことはござらぬ。こゝへ來て一杯注いでやつてくだされ。

（むすめは逡巡して頭をふる。）

長崎の弟。この通り、ほかにも大勢の人がゐる。まあ、安心してこつちへお出でなされませ。

娘。父さん。

（娘は父の顔色をうかゞへば、名主も一旦思案してうなづく。）

名主。まあ、可いわ。忌ぢやと云つたら、こんな奴は、どんな仇をしようも知れぬ。みこまれたが因果とあきらめて、まあ一度注いでやれ。（異人にむかひて。）ぢやが酌は唯つた一度ぢやぞ。（指一本を見せて。）よいか。

（異人うなづく。）

長崎の弟。さあ、頼みます。

（徳利をわたせば、娘は氣味惡さうに進み出で、遠方より手をのばして酌をする。異人は打笑みながら、杯をぐつと飲みほし、左も愉快さうに叫ぶ。）

異人。おゝ、べらぼう、べらぼう……。

（むすめは徳利を床几におきて、あわてゝ飛び退く。）

大坂。このやうな奴でも、美しい女子の酌は嬉しいと見えるわえ。はゝゝゝゝ。

皆々。はゝゝゝゝ。

江戸。ところで、相場はいくらと決つたね。三十兩では不承知か。

男乙。そこをもう少しばかり、買ひあげては下さらぬかな。

江戸。えゝ、面倒だ。そんなら三十五兩……。もうこゝらが見切時だらうぜ。

男三人。よろしうござります。

名主。やれ、やれ、これで先づ埒があいたと云ふものぢや。（男どもに向ひ。）これ、わしに一杯買ふのを忘れてはならぬぞ。

男三人。あい、あい。

長崎の弟。では、どうでも見世物に賣られるのか。

長崎の兄。どこの國の人か知らぬが、遠い異國へながれて來て、見世物にまで賣られるとは、よくよく不運な人ぢやなう。

（兄弟は顔をみあはせて嘆息す。こなたの人々は耳にもかけず。）

べらぼうの始

江戸。さあ、いよ〳〵金儲けの始まりだ。前祝ひにどこかで一杯やらうか。

大坂。お前、振舞うてくださるか。

江戸。卑怯なことを云ひなさるな。儲かれば山分けの仕事ではないか。ところで、一體これはなんといふ名を附けたらよからうな。

大坂。さればよなう。なにか奇妙、不思議な名はあるまいか。

江戸。なんだか知らぬが、さつきから頻りにべらぼう、べらぼうと云つてゐるから、寧そべらぼうと名を附けたらどうだらう。

大坂。べらぼう……。これは妙ぢや。

名主。なるほど、べらぼうは面白からう。

皆々。べらぼう、べらぼう。

大坂。評判ぢや、評判ぢや。はゝゝゝゝゝ。

（見物の男女も同じくべらぼう、べらぼうと笑ひどよめく。異人は驚異の眼をみはり四邊を見まはす。江戸の商人は茶代を置きて起つ。）

江戸。では、金の取引やら前祝ひやらに、これから飲みに行くとしようか。

名主。飲みにゆくなら私がよいところへ案内しませう。

大坂。え、お前も一緒に來なさるのか。

名主。それが名主の役徳ぢや。はゝゝゝゝ。

娘。では、わたしは先へ歸りますぞ。

名主。おゝ、よい、よい。さあ、皆の衆。ござれ、ござれ。

男三人。さあ、行かう、行かう。

（みな〳〵行かんとす。異人は不審の體にて動かず。大坂と江戸の商人は立寄りて酒をのませるから一緒にゆけと、手眞似にて誘ふ。異人うなづきて連立ちゆく。見物人はちり〴〵に去る。むすめも去る。茶店の女は茶代をあつめ、茶碗を片附ける。）

茶店の女。大風の吹いたあとのやうに、急に靜になりました。

長崎の弟。あの異人もたうとう賣られて行つた。（笑ひ出す。）わし等があれほど云つて聞かしても、こちらの人達には判らぬとみえる。はゝゝゝゝゝ。

長崎の兄。なにが可笑い。おまへは若いから笑つてゐられるのぢや。

長崎の弟。でも、これが笑はずにゐられるものか。はゝゝゝゝゝ。

長崎の兄。まだ笑つてゐるのか。わしは皆さんに訊いてみる。

（兄は床几を起つて、觀客席にむかつて進み出づ。）

長崎の兄。みなさんに烏渡申上げます。智慧の少い人たちに限つて、なんでも新しいものを見ると、自分たちが物を識らぬのを棚にあげて、むやみ矢鱈に不思議がつて、おどろいたり呆れたりするばかりか、擧句の果には碌な目に逢はせぬものでございます。わたくしは見世物に賣られて行くあの異人が氣の毒でなりません、まつたく氣の毒に思ひますが、皆さんはなんと思召しますか。わたくしの弟のやうに唯笑つておいでになりますか。いえ、こゝですぐに御返事をうかゞふには及びません。お家へお歸りになりましてから、よくお考へくださりませ。いつの代にもそんなことが無いとは限りませぬ。——いや、飛んだおしやべりを致しました。では、これで幕をおろさせます。

（兄は觀客に向つてしづかに會釋す。）

——幕——

綺堂戯曲集第七巻
（定價金貳圓參拾錢）

大正十四年五月五日印刷
大正十四年五月八日發行

著作者　岡本敬二　東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦　東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者　堀江關武　東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所　常磐印刷所

著作者印檢

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地（電話大手五一・四二一〇）（振替口座東京一六一七）　春陽堂

◇綺堂戲曲集◇

第壹卷 室町御所、切支丹屋敷、俳諧師、熊谷出陣、鳥邊山心中、夕立崩れ、修禪寺物語、わが家、能因法師、

第貳卷 勾當內侍、雨夜の曲、貞任宗任、番町皿屋敷、入鹿の父、兩國の秋、朝飯前、蟹滿寺緣起、小栗栖の長兵衛、

第參卷 西南戰爭閑書、お七、賴家阿闍梨、清正の娘、戰の後、遊女物語、京の友禪、邯鄲、寺の門前、

第四卷 品川の臺場、淺茅ヶ原、眞田三代記、浪華の春雨、なこその關、平家蟹、新朝顏日記、近松門左衞門、自來也、

第五卷 大坂城、蒙古襲來、籠釣瓶、楠、弟切草、佐々木高綱、御影堂心中、曾我物語、仁和寺の僧、

第六卷 家康入國、長曾禰虎徹、城山の月、箕輪の心中、板倉內膳正、阿蘭陀丸、小笠原島、酒の始、

第七卷 村井長庵、長恨歌、階級、小田原陣、天の網島、細川忠興の妻、べらぼうの始、

第八卷 前太平記、尾上伊太八、小坂部姫、亞米利加の使、籠の梅、白虎隊、二枚繪双紙、稚兒が淵、

四六判美本　價各貳圓參拾錢　送料十八錢

527
16

終